

「原爆文学」探査⑤

山福康政『焼け跡に風が吹く』

坂口博

山福康政は広島市の爆心地近くに生まれている。一九二八(昭和3)年一月四日のこと。たまたま、祖父の道楽で猿楽町(現・中区大手町)にあった家業の旅館が潰れたため、二歳のときに九州・若松へ移住している。そのまま、「生まれ故郷の広島」に住んでいたら、一家全滅の可能性も高かった。両親と姉二人がいるが、十歳年上の姉は「広島のみささの三篠に母の実家があつて、祖母がひとりきりで駄菓子屋をやつていて、……女学生のみささだつた姉も、知らない九州の若松へは行きたくないといつて、そのまま三篠に残り、県立広島高等女学校を卒業後、西魚屋町(現・中区袋町)の叔母宅に寄寓して「新天地繁華街の書店」に勤めた。その姉も、結婚して中国大陸へ渡つていたので、被爆はしていない。もうひとりの姉は「ひとつちがいがい」。

自伝的な作品『原つばに風が吹く』(福音館書店、88・3)の続編といえる『焼け跡に風が吹く』(福音館書店、95・1)は、作者の小学校卒業(41・3)前後から一九四七年末までを題材に描いている。ほとんど「実録」といえる展開だが、最後は広島との別れである。

ぼくは太田川の鉄橋から遠くの相生橋あたりを見ながら、「さ

よなら、ぼくの広島」と心でつぶやいた。

川面は朝の光を反射して、ガラスの粉をまいたようにまぶしかった。

山福は、生活の基盤とした若松では印刷所の経営者、いやガリ版屋のオヤジとして生前から広く知られていた。特徴をもった書体とイラスト画も愛好されている。その彼が七六年一月に脳血栓で倒れたあと、リハビリをかねて書き継いだのが、これらの作品だった。最初は『付録』(天籟俳句会、79・11)という俳句を添えた絵草紙として刊行された。そこで早くも四七年の広島行が、絵のなかに簡略にまとめられている。これは、後に『ふるくー昭和庶民絵草史』(草風館、82・6)の題名で改訂版が出された。

昭和22年の初夏、広島のみささの叔父の自転車屋で働くことにした。紙製のドブ鼠トランクを下げ、飛行兵のジャンパーに兵隊靴で出かけた。西魚屋町に店はあつた。爆心地の近くである。夜十時過ぎ、霧雨が降つてむし暑い。道路だけがきちんと走っている。瓦礫から一面に三十糎ぐらいの高さで蒸気があがっている。そのざわざわした感じは巨大な生物が、皮を剥がれ、そのうつぶせの赤むけの背から湯気が立っている感じだった。鬼気迫るおしかぶさる空気に後首を押えられた工合で、背中のみささのうしろが気になる。何度か振返つてみた。

焼跡は想像をはるかにこえていた。西魚屋町は繁華街だった。紙屋町のそば、ぼくの母の妹の叔母は八月六日にピ力のみささで死んだ。なぜか左半分だけ焼け残つたのを姪(引用者注・正しくは従妹)が二日後学童疎開先からぬけて来てトタン板の上で焼いたそうだった。当時小6だった。叔父は出征していたが山口県にいたので

帰るのが早かった。……

太田川が元安川と本川に分れる三角洲に現在の原爆公園があり、めずらしいT字型の相生橋がかかっている。広島は川の町だ。川の分岐点に爺さんの山福旅館があった。「道楽のお蔭で助かった」というのが、ぼくの父母の口癖だった。敗戦間近に来たときも、たしかに旅館はあった。……打ち続く瓦礫にはうんざりした。ピカドンの話は誰もしたがらなかった。ぼくは原爆忌の俳句をいまだ作ったことがない。三鬼の卵の句を見ても、悪いとは思わないが「ウーン」と絶句するしかない。

ピカの日には沢山の人が流れた。青い澄んだ水が、どうして赤い色で流れてないのかと思った。自然は嘘つきだと思った。『焼け跡に風が吹く』では、広島再訪が次のように描かれる。

夕方の六時前に発車した汽車は夜の十時すぎに広島についた。いくつも並んだホームは昔のままだったが、改札口を出ると待合室の周囲に人々がボロ布のようにごろごろ横になつていた。たぶん駅舎をネグラにしている人たちだろう。駅前広場には輪タクがひしめき、その向こうにバラックが立てこんでいる。闇市のような。……すこし離れた市電の停留所に行ったが、終電はさつき出たばかりだった。輪タクを使おうかとまよったが、なげなしの金がからになる。腹はべこべこだが、よし、とにかく歩こうと決心した。うろおぼえだが紙屋町までそんなに遠くないはずだ。……八丁堀電停のそばに焼けただれて黒々とそそり立った異様なビルがあった。看板で福屋百貨店であることがわかった。……やがて見おぼえのある広い三差路に出た。紙屋町電停だ。まっすぐ行くと相生橋で、左方向に曲がった軌道づ

たいに行つて、たしか一つ目か二つ目の停留所を左に入れば西魚屋町の叔父の家があるはずだ。

この叔父の自宅兼店舗から、手伝いに来ている小学校六年生のマサオとともに、「電車道を横ぎ」り、「相生橋からひとつ川下の橋」を渡る。「右に曲がつてちよつととまれや」。

そこは、元安橋を渡つてすぐの、現在の平和記念公園、「原爆の子の像」近くの土手であろう。

ぼくは草のはえた川の土手に腰をかけた。

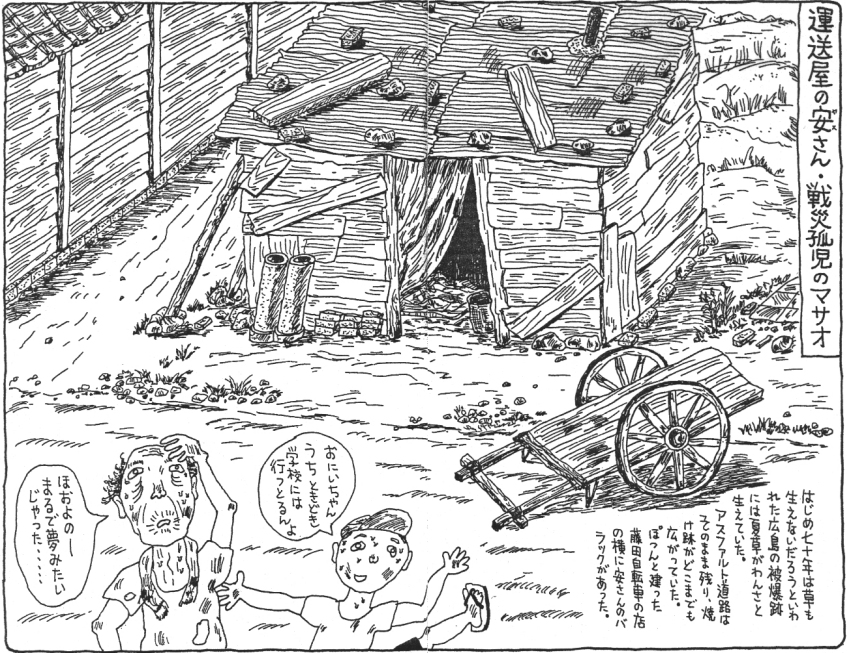
「なーんも残つたらんの、この辺の上空でピカッ、ドンちなつたんやろうが、向こう岸の鳥かごみたいな丸天井のビルの残骸が産業奨励館か。真上からやから、倒れんでガワだけ残つたんやの。向こうの猿楽町に、昔わしん方の旅館があつたんや」

墓もある広島へ、母親と初めて行つたのは「小学校四年の夏休み」で、「市電で相生橋をわたつたとき、母が、『あそこがもとの山福旅館よ』と教えているから、原爆ドームより電車通りに面した場所に、生家は所在したのだろう。

なお、西東三鬼の俳句は「広島や卵食ふ時口ひらく」。「広島を黒馬通り闇うごく」とともに、『句集広島』（句集広島刊行会、55・8）に収録されている。三鬼には他にも、「広島忌や浮袋砂まぶれ」「原爆の日の拡声器沖へ向く」（『変身』所収）といった句もある。これも一九五五年の作品である。

ところで、「空襲を受けた八幡、小倉、門司、下関の焼け跡をこの目で見えてきたから、広島のようにすもおよそ想像はしていたが、ピカドンはケタちがいだ。ぼくは背骨をさつと引きぬかれたような衝撃を受けて、茫然と立ちすくんだ」のだったが、「生まれ故

運送屋の安さん、戦災孤児のマサオ



はじめ十年は幸す
生きたらうとどろ
れた広島は被爆地
には運送屋がやまて
生かしてやうと
アノフルと通路を
このまま残り、必
件種が、アノフル
広がった。
ぼくと建てた
廣田自販車のお店
の機に安さんのバ
ラックがあった。

郷」の親しみから、半年ほどの広島滞在中に、当時のことをかなり訊ねまわったようだ。

めずらしかった焼け跡も連日ながめているとうんざりする。それでもあちこちぼつんと立つた墓標の前ではよく立ちどまつた。広島県女とか広島商業とか、学校名の筆文字が風雨にさらされ薄黒くなった墓標の前には、だれが供えるのか花や線香の煙がたえなかつた。

ピカのことばだれに聞いても「天地がひっくりかえった」とか「まるで地獄じゃった」と口ごもっていうだけで、それ以上聞こうとすると、「遭ったもんでないとわかりやせん」といような顔をされた。まるで疫病でもおそれるみたい。実際に被爆して生きのこつた人は、どこかにかくれるように住み、ひそかに死ぬのを待っている気がした。たまたま市電に乗ると、かならず何人かのケロイドの人を見かけたが、本人はうつむき、まわりの人も見ても見ぬふりをした。

これが、まぎれもない原爆投下二年目の広島姿だった。山福はへんな感傷を交えずに淡々と記していく。

そこでは、開成り金として成功し、原爆で亡くなった妻の後添えとして「まるで不つりあいな美人」を迎え、既に子供が産まれている叔父もいる。新しい叔母は、早稲田大学に在学中だった婚約者を、学徒出陣で送り「神風特攻隊で出撃したきり……」だった。

母の姉婿のもう一人の伯父・安さんは、隣接地に「押すたとおれそうな小さなバラック」を建てて、大八車の運送屋で暮らしている。「まるでミノムシ小屋だ」。戦災孤児のマサオは「練兵場の

すみのバラック」に住み、六歳の弟を養っている。学校へは「行方不明と思われたら困るけん、ちよくちよくは顔を出しとる」。弟は「自分が留守のときはとなりの人にたのんでいる」という。広島駅では「混雑した列車をせせら笑うように、がらあきの進駐軍専用の列車が通過する。車窓からは何人かのG Iがのんびりとこちらを、サル山でも見るようにながめている」のだった。

うだるような真夏もすぎて、いつも休む川べりや焼け跡のあちこちに、野草にまじってコスモスが咲きはじめた。ぼろぼろの焼土から自然に花が咲くとは。ぼくは大地の奇蹟のようにその花を見た。ちりちりと風にふるえる色とりどりのコスモスは、なにかをうったえているようだ。

ピカドンから一年以上（引用者注・ここは一九四七年の夏だから、精確には「二年以上」だが、もちろん「一年以上」でも間違いではない）すぎて、広島は日まじしに復興しつつあったが、爆心地周辺はいまでもブラックホールみたいに瓦礫のままだ。

こうした「原爆以後」の光景も視野に入れながら、原爆に関わる問題を考えていきたい。けっして作者は声高に「戦争反対」や「原水爆禁止」を叫ぶのではない。それでも「ぼくは軍隊に入りかけに敗戦になって命拾いしたから、二度と愛国なんていわんぞと決心しとると。だつて協力するだけさせとつて、あとは知らんぶりだからね。死んだ人たちが浮かばれんよ」と、筋は通す。作者の視線は軽やかで暖かい。自らを「タンポポの綿毛」と称する。しかし、それを軽薄さとして貶めるなら、それは違うだろう。吹きぬける風に煽られ、無意味にふらふらと漂っているのではない。山福には「ふらふら絵草紙」の副題を持つ「西日本新聞」福岡県

版に連載(原題「ちよつとそこまで」、86・4・17〜88・4・28)した『風の道づれ』(裏山書房、91・7)という秀抜な作品もあるのだが、これは上野英信の家族を中心とした「筑豊文庫外伝」の意図もあつた。筑豊文庫に関わつた多数の人物が紹介されている。英信の子息は朱^{あけみ}で、山福の長女は朱実^{あけみ}といった偶然の共通点も見えてくる。山福朱実は父親譲りの画才を生かし絵本作家として知られ、随筆集『蔵の家』を持つ上野朱の文才にも定評がある。なお、英信は連載中の八七年一月二日に亡くなつた。生半可な浮遊した立場(世俗の名譽・名声や権力を求めたり、固守するような)では、これらの著作は生まれぬ。また、「西日本新聞」には50回随筆シリーズの一環として、画文「ふらり路地裏50年」(95・5・11〜7・7)も連載した。

山福康政は一九九八(平成10)年二月一四日、脳出血のため新日鉄八幡病院で亡くなつた。二十年以上に及ぶ闘病生活は、これら若松をはじめとして独特のタッチで描いた作品を残したことを考えれば、私達には僥倖といえる出来事だつたかも知れない。思えば、タンポポも、そしてコスモスも、決して軟弱な植物ではない。踏まれても踏まれても耐え続ける。「タンポポの綿毛」、それはおそらく山福にとつて「自由」の表象だつたのに違いない。あらゆるイデオロギー、政治思想・宗教感情からも自由闘達に世界を見ていくことの。

人はぼろぼろになつても夢を持つが、ぼくにはその夢がまだ見つからない。敗戦でぼくの心にぼつかり穴ぼこができた。穴ぼこにはいつもなりゆきまかせの風が吹きすぎる。……どんな人も自分の穴ぼこをうめ続けているのだ。